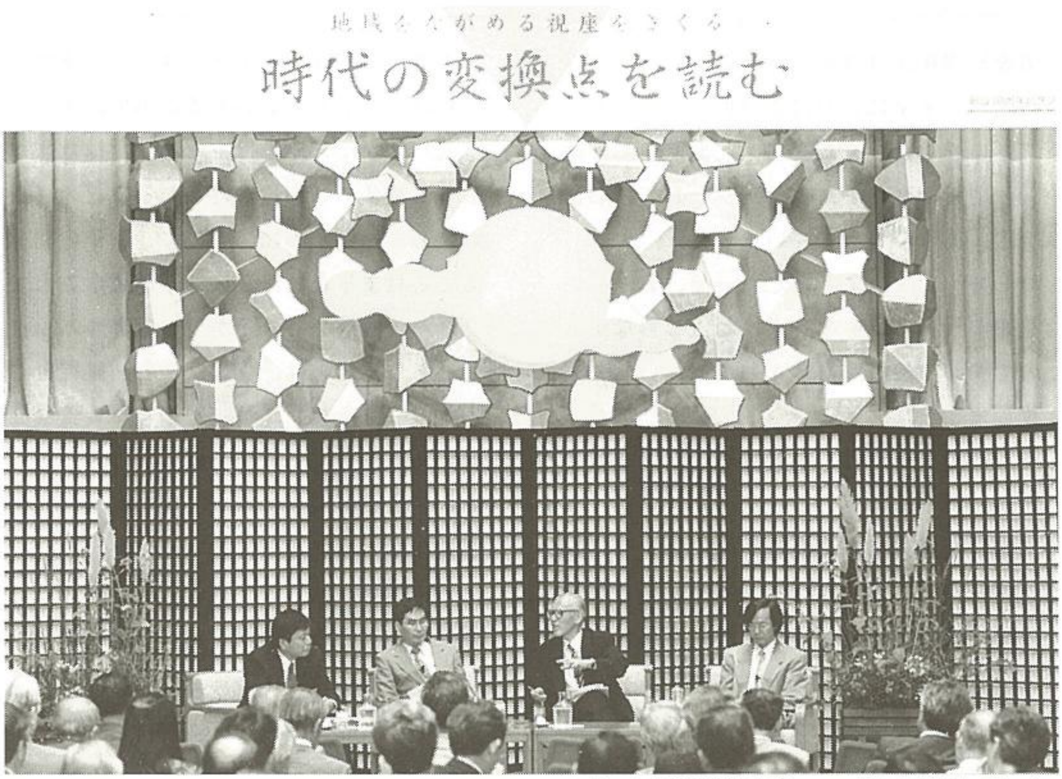
ISSN 0918-1954

アルパック ニュースレター



アルパック創設30周年記念フォーラムを開催しました
（本文中に関連記事があります）

アルパック　ニュースレター　もくじ

1997年11月1日

●アルパック創設30周年記念フォーラム　お礼 …………………… 2
●アルパック創設30周年記念フォーラムを開催しました ……… 3
●沿岸域の環境保全創造をめざすシンポジウムを開催 ………… 6
●京の街を歩いて気づいたこと ………………………………… 7
●自分とは異なるものに触れて、精神の
自在で大胆な力を蘇らせる ………… 9
●筏下り体験記 ……………………………………………………10
●アートによる魅力的な空間づくり ……………………………11
●若手技術者の研修会に参加して ………………………………12
●おおやふれあい市民農園農事通信 ……………………………13
●今、京都が元気だ！ ……………………………………………14
●うまいもの通信㉑ ………………………………………………14
●まちかど …………………………………………………………16

NO.86

こころのネットワーク アルパック創設30周年記念フォーラム　お礼

三輪　泰司

創設30周年記念フォーラムのシンポジウムと交流パーティに、おはこび頂き、ありがとうございました。また遠く、北海道から沖縄から、地元の産品をメッセージとして、お送り頂き、ありがとうございました。

お一方、お一方に、またお一品、お一品にお礼を申し、ご紹介申し上げねばならなかったのですが、何時間あっても及ばないと、失礼致しました。

岡本道雄先生には、過分のおことばを頂き恐縮しております。

関西学術研究都市調査懇談会が始まりましたのは、19年前の９月14日でした。創立25周年の園遊会にはお元気でした河野卓男さんがお亡くなりになり、寂しいことです。

地球と人類を危機から救い、未来を開かねばと、皆さんの限りない“愛”が人々の共感を呼び、大きな輪になっていったのでした。

そういうドラマの中に立たせて頂きましたことは、最高の幸せでした。

８月19日、ご静養中の奥田東先生をお訪ねしました。満92歳のお誕生日です。ここ数年毎月19日前後に、お誕生祝いと称して飲んでおりました。賑やかに酔っぱらうのが好きだが、それもかなわなくなってと、代わりに励ましのことばを頂いてきました。

人さまより抜きん出た、きらめく才能があるわけでもなく、いいとこの出で、大きな経済的バックがあるわけでもなく、はたまた威張って神仏のご加護を得られるほどの真正直者でもないはずの私ですのに、30年の間、勤めてこれましたのは、誠に不思議なことです。

なんとか勤めることができ、アルパックが今日ありますのは、立派な学者・研究者諸先生方のお導きのおかげ、厳しくも貴重な仕事で鍛えて頂きました委託者の皆様のおかげ、そして自己の確立に努めてきた優秀な社員の懸命な働きのおかげであります。

アルパックは、この30年の間に、大きな華やかな仕事をさせて頂きましたが、最も大事にしてきたことは、小さな過疎地の村おこし、大都市の片隅の街づくり、次代を担う子供たちのための施設づくりです。そうしたところで、懸命にそして楽しくご奉仕されている方々と“心のネットワーク”を“心の糧”として、誤りなき仕事が出来たのだと思います。

講演とシンポジウムで、先生方が、解きあかして下さいましたパラダイムシフト＝枠組み転換が、静かに急速に進んでいることは、そうした実践活動をされている皆さんと社員は、実感をもってうけとめられたと思います。

次の30年は、想像もできない展開が進むでしょう。いよいよ次世代へのタッチ完成の時期にいたりました。

社員の一人一人が、自主・自立型のグローバル・ネットワーク・アルパックの一員として強く成長しますよう、皆様の叱咤激励をお願いし、重ねて厚くお礼申し上げます。

（取締役会長　みわ　ひろし）

アルパック創設30周年記念フォーラムを開催しました

山口　繁雄

去る９月11日、国立京都国際会館において、アルパック創設30周年記念フォーラムを開催致しました。

当日は、平日の多忙な中にも関わらず、約370名の方々にお越し頂きました。私共としては望外の喜びとするところであり、感謝申し上げます。

今回の記念フォーラムは、２部構成とし、第１部は「シンポジウム」、第２部は「交流会」とさせて頂きました。

【第１部　シンポジウム】

第１部のシンポジウムは、パラダイム・シフトの進む時代的背景を考慮して、その基本テーマを「時代の変換点を読む―地域をながめる視座をさぐる―」とし、大阪大学名誉教授の大久保昌一先生に「基調講演」をして頂きました。また、それに引き続いて京都大学教授の内藤正明先生には環境論の立場から、京都大学助教授の逢沢明（本名：稲垣耕作）先生には情報論の立場からお加わり頂き、大久保先生とともに「対談」を行わせて頂きました。

〔基調講演〕

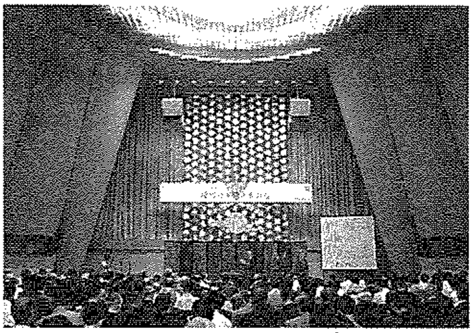
基調講演では、地域計画の理論的研究を行ってきた大久保先生一流の深くて鋭い分析を披露して頂きました。話の内容は大変に深くやや難解なものでしたので、ここで正確にお伝えする能力を持ち合わせませんが、私なりの理解で要約的にまとめますと、およそ次のようなものでした。

現在、モダーンからポストモダーンへの転換期にあるが、今後の計画理論のあり方を検討する場合は、歴史的な視点から総括して新しい計画理論を構築する必要がある。

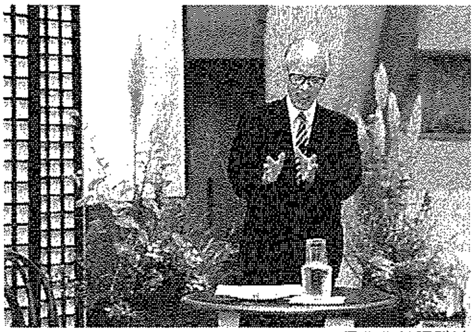
特に、我が国は、西洋諸国が通過してきた近代化の５つのゲートウエイを経験しないままに「近代化」してしまったために、改めて西洋諸国が経験してきた歴史に学び、その先進性を学ぶとともに、その限界性もわきまえて、新しい理論構築を進めていく必要がある。

西洋の先進性は、近代合理主義や科学主義あるいは人間中心主義等に基づく科学技術の発達、近代産業の発達、生活文化の向上等々であるが、近年その限界性が顕著になりつつある。その最たるものが「地球環境問題」（人類生存の危機）であり、物質的には豊かになったが、精神的には貧困化してきたといわれる「精神文化問題」（人生における幸せ感の喪失）等である。

この限界性を何としても乗り越え、豊かに

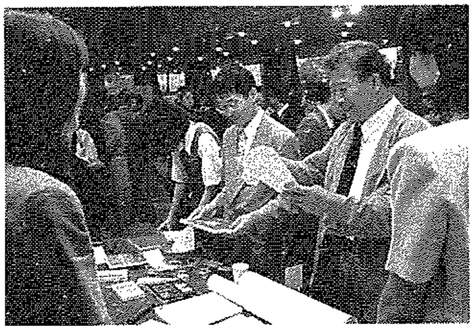


シンポジウム会場風景



大久保先生基調講演

ハートフル交流会オープニング



手づくりアートコーナー

生活していける地球社会を創出していかなければならない。そのためには、「西洋」と「東洋」の思想や倫理感、社会システム等を改革し統合させて、新しい社会づくりを行っていく必要がある。

特に、地域計画の分野では、ハワードの「ガーデン・シティ」やコルビジェの「 300万人都市」論等を経て、「近代都市（モダーンシティ）論」が定着してきたが、これからは上記のような視点から「ポストモダーン・シティ論」を追求していく必要がある。

ポストモダーン・シティの計画論では、従来の機能主義、技術主義、合理主義は否定され、有機主義、技術の人間化、メタ合理主義が主流にならなければならない。

目標とする「人生の幸せ感」は、個人によって異なるものであり、皆が同じように幸せになるという一元的な「マスタープラン方式」は否定され、それぞれの人が幸せになるという多元的な意思決定システムを内包した方式が求められている。

そうした意味では、特に我が国においては、計画理論のベースとなる「民主主義」を改めて学び直さなければならない。

〔対談〕

上記のような基調講演を受けて、対談に入りました。対談では、基調講演で提起された「ポストモダーン・シティ」のイメージと実現のシナリオについて議論を深めて頂きました。

まず、ポストモダーン・シティのイメージについては、環境論を研究している内藤先生からは、「農業と工業がバランスをとった「環境循環型社会」をイメージすべきである。そのモデルとしては「エコタウン」と称する都市が考えられる」ということで、そのモデルを提示して頂きました。

また、情報論を研究している逢沢先生からは、「これからの都市は、複雑系の社会となるので、ネットワークが大事になる。そうした意味では、ポストモダーン・シティは「ネットワーク社会」になるのではないか」という見解を述べて頂きました。

大久保先生は、お二人の見解を踏まえて、「ポストモダーン・シティは「サスティナブルシティ」である必要がある。その都市は、阪神大震災でも明らかになったように、第一に市民が主体の都市である必要があり、第二には、内藤先生が指摘したように、都市と農村が共生する必要がある」といった点を強調されました。

ポストモダーン・シティをどう実現化するかという点については、引き続き大久保先生から次のような点が強調されました。

「都市づくりは市民が主体であり、皆が参加しながらそれぞれが「幸せ感」を感じることのできる社会をつくることが大事で、そのためには近代化の過程でバラバラになった

フローラルアーティスト井上恵子氏
による山野草の生け込みライブ

屋外に設けたかがり火と縁台

「個」、あるいは崩壊していった共同体を、新しい共同体としてどう構築していくかが問われている。

したがって、ネットワークを使ってどのように心と心をつなぐかが大事になってくる。そのための仕組みとしては、市民が問題別にフォーラムを組織化して政策決定に関与する方法やＮＰＯや最近ではＴＦＯ（The Third Force Organization)といった認識共同体としての市民集団等がアクターとして出現してくるよう努めなければならない。」

以上のような内容の基調講演と対談が行われたわけですが、正面から切り込んだテーマで議論するにはやや時間が不足していたために、皆さんからは「もう少しじっくりと聞いてみたかった」という御意見を多数の方から伺いました。当日の記録集は３人の先生方の補足的な見解も含めて、現在作成中でございますので、近くご希望の方にはお手元にお届けさせて頂きたいと考えています。

【第２部　交流会】

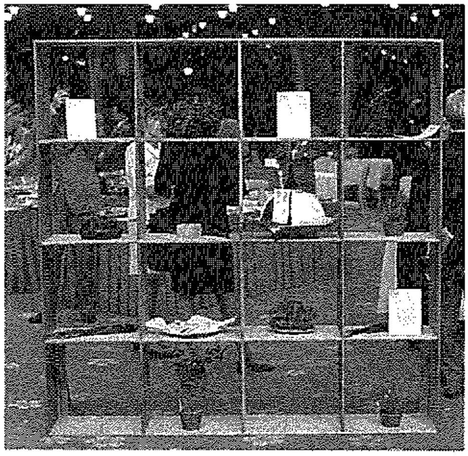
シンポジウム終了の後、別室にて交流会を持たせて頂きました。今回は、会場の演出テーマを「環境」「創造」「参加」とし、秋の夜長を月見でもしながら語り合って頂きたいという想いから「観月」をイメージデザインした「ハートフル交流会」を開催しました。多くの山野草で飾りつけた屋内会場とかがり火と縁台を設置した屋外会場を用意致しました。また、屋内会場には、私共が業務でお付き合いのある全国の各地域から特産物を取り寄せた「アルパック屋台」や「手づくりアートコーナー」等を設けさせて頂きました。

何分、短期間の準備でしたので、十分なおもてなしが出来なかったのではないかと思いますが、所員の手づくりの企画でしたので、御容赦頂きたいと思います。

私共としては、多くの方々と交流を深めさせて頂くことができましたことを大変にうれしく思っておりますし、感謝しているところでもございます。また、参集して頂いた方々が相互に交流を深めて頂いたことも大きな喜びとするところでございました。

今後もこのような機会を大切にしていきたいと考えていますので、その節もよろしくお願い致したいと思います。

（京都事務所長　やまぐち　しげお）



特製のテーマ展示棚

沿岸域の環境保全創造をめざすシンポジウムを開催

杉原　五郎

さる９月17日（水）、大阪のＯＢＰにあるＫＤＤビルにおいて、〈沿岸域の環境保全創造〉をテーマとするシンポジウムを開催しました。シンポジウムには、大阪湾ベイエリアに係わりを有する行政機関（運輸省、建設省、大阪府、大阪市、兵庫県、神戸市など）をはじめ、住宅・都市整備公団、（財）大阪湾ベイエリア開発推進機構、大学関係者、コンサルタントなど40数名の参加をいただきました。

第１部では、アルパックが平成８年度にＮＩＲＡから研究助成を受けて行った「持続的発展のための沿岸域環境保全創造システムに関する研究」の研究報告が行われました。最初に、研究代表者である盛岡通先生（大阪大学工学部環境工学科教授）から研究の位置づけについて総括的な報告をしていただきました。続いて、直接研究に係わったアルパックの研究担当者（杉原、竹野、原田）３名より、研究の成果である３つの政策―「情報交流及び技術移転システム」「新たな計画・事業システム」「市民参加の広域連携システム」―についてＯＨＰを用いて説明を行いました。

第２部では、盛岡先生の司会のもとに、松岡俊二氏（広島大学大学院国際協力研究科助教授）、白石修章氏（運輸省第三港湾建設局大阪湾整備調整官）、羽原伸氏（建設省近畿地方建設局企画調査官）、長谷川明氏（（財）ひょうご環境創造協会環境創造部長）、柴田純治氏（㈱パシフィツクコンサルタンツ・インターナショナル）の５人のコメンテーターから第１部の研究報告に対してコメントをいただきました。

最初に、松岡氏は、国際的な環境協力のあり方についてエコノミストの立場からコメントされ、日本が沿岸域の環境問題で国際貢献していく際には、アジアの国々の経験に学ぶという姿勢に立つとともに、わが国自身の沿岸域問題への取り組みに対する厳しい自己分析を踏まえることが重要である、といった問題提起をされました。白石氏は、望ましい環境のあるべき姿について深めていくことが沿岸域の環境計画論を組み立てていく上で極めて重要であると強調されました。羽原氏は、防災の重要性、水質浄化の問題、事業の評価のあり方、市民参加と合意形成のあり方、関係機関の役割分担と連携のあり方など多岐にわたって独自の見識を披瀝されました。長谷川氏は、市民参加の具体的な方法、日本型ミティゲーションの実現可能性、新たな研究機関（アジア太平洋沿岸域環境研究センター）と既設の類似機関との調整の必要性などに言及されました。最後に、柴田氏は自らの海外におけるコンサルタントとしての経験を踏まえて、アジアの成長が著しい国々の沿岸域の環境問題は極めて今日的な課題となっていること、こうした環境問題を具体的に検討していくには各種専門家による協働と情報の整備が決定的に重要であること、研究センターの創設と運営にあたっては民間資金の活用を図ってはどうか、市民参加にあたっては子供たちの参加に特に留意してはどうかなど、貴重なコメントと提案をいただきました。

これらのコメントを受けて、会場の参加者とのやりとりも幾つかなされ、短時間ではありましたが、大都市圏沿岸域の環境保全創造というテーマについて参加者の認識が高めら

れ、政策についての理解もある程度進んだように思います。ちなみに、シンポジウム終了後、コメンテーターと研究会のメンバーを中心に交流の場が持たれ、そこにおいても有意義な情報交換が行われました。

今回企画したシンポジウムは、沿岸域の環境保全創造という今日的でグローバルな課題について、行政、大学、民間など関係者の間で幅広い視点から集中的に論議する貴重な機会となりました。私は、1985年頃より自主的な研究会の活動を通して、沿岸域の開発と環境のあり方について研究を積み重ねてきました。その研究の一環として、日米沿岸域セミナーという形で２度にわたって国際的なセミナーを企画するとともに、都市環境研究会の一メンバーとして「都市とウォーターフロント」「沿岸都市とオープンスペース」といった書物も共同執筆しました。今回のＮＩＲＡの研究とこれに基づくシンポジウムの成果も踏まえながら、引き続き沿岸域研究を進めていきたいと思います。

（大阪事務所　すぎはら　ごろう）

京の街を歩いて気づいたこと
ー中国留学生の視点からー

李　桓

私は京都の街を歩くのが大好きである。それは単に京の女性の美しさに魅されるのではなく、京の街の楽しさに惹かれるのである。

京都の街は私にとって、他のところであまり感じたことのないような馴染みやすさと楽しさがある。思い出してみれば、京都に来た最初の頃から違和感などを感じず、むしろある種の吸引力を感じていた。

この度、アルパック京都事務所で研修（中国華僑大学から）の機会を与えていただき、京都の街を歩く機会が随分と増えた。私は昼休みや仕事が終わった後の夕方の時間を利用して、京都の街を歩いて楽しんだ。

京都の街は非常に明確な骨格をもっている。直線的で、直角的で、このような単純さはむしろ現在のプランナーたちに避けられようとするところであろう。一体、京都の街の魅力はどこにあるのか。私はこのような問題意識をもって、特に四条河原町周辺を中心に、街の特徴を観察し、そしてまちづくりのあり方に照らして自分なりの考えを整理してみた。

まず街には歩くスペースが適度にあり、歩道のスケールは人間的である。歩道は車道と平行し、一体的な道路空間をなしている。このような歩車一体化の道路は、ある程度の交差と混雑が生じている反面、動線の多様さを生み出している。その分、街の賑わいにつながっているといえる。歩道は、やや低いといえるくらいの庇で覆われ、ある種の統一感が得られている。ヒューマニックな感じはその庇の低さと無縁ではないといえよう。指摘すべきところは、その庇は車道側に向かって少し高くなっており、それによって、歩道と車道との一体感が生まれ、そして何よりも有り難いのは空が歩道から見えるようになってい

四条通の庇（四条寺町）

るのである。

歩道に沿って小店舗がズラリと並んでおり、街には活気がもたらされている。

店舗の内容を見てみると、非常に多様な商売が行われていることがわかる。伝統的なものから現代的なものまで、実用的なものから芸術的なものまで、飲食関係から学問的なものまで、パチンコ屋から古本屋まで、とにかく幅広い商売の内容が含まれている。それらを別に買わなくても、生活の情報や時代の情報が店の中から溢れ出てくる。

一方、各店は違うファサードをもっており、様々な表情を見せてくれている。商品の直接展示から芸術品の飾りまで、素材も自然のままのものからピカピカとした人工のものまで、デザインのセンスも普通の発想から奇想のもの（例えば枯山水を壁に掛けるなど）まで、俗っぽいものから品格の高いものまで、様々な工夫がみられる。

更に面白いところは各店の入口は一様に、歩道ぎりぎりのところに沿っているのではなく、奥に凹んだり、ちょっとした前庭のような緩和空間をつくるなど実に多様なアプローチの方法があり、街空間には「遊び」が与えられるのである。所々に地下か２階かにつながる階段がストレートに歩道の際のところに出されており、所々にまた、天井を感じさせないくらいの高い空間が歩道の庇の後ろに隠されている。歩いていくと、実に多様な感受性が与えられる。

京の街は、表の空間だけではなく、奥にまた、路地裏の空間がある。そこはもう一つの小天地であり、伝統文化の粋が味わえるところである。

人間行動の多様性も重要な特徴である。早く歩く人、悠々と歩く人、バス停で立ち止まる人、花壇に座る人、ティッシュペーパーを配る人、群になる人、孤独に歩く人…、観察してみると、実に様々である。特筆すべきところは、あちこちに立って看板を担いでいる妙な雰囲気のオッサンが、京の街の楽しさに実に重要な役割を果たしている。彼らは街の奥にある空間を日常の形で見せてくれるからである。

最後に何よりも重要なのは、京の街は自然の空間とつながっているところである。河原町を東へ歩いて行くと、せせらぎと歴史的な雰囲気が感じられる高瀬川に出会い、更に、広々として、京都の東の山々を一つに収める鴨川に出会う。これらの河川空間は部屋についている窓のように、京の街に呼吸できる空間を与えてくれるのである。

以上、四条河原町周辺を中心とした街の特徴を並べてみた。それらをまとめていうと、簡潔さと豊富さ、統一性と多様性、伝統と現代がうまくまとまっている、ということである。

そこで、私は都市計画において、計画のあり方について考えた。京都の街の骨格の特徴（単純さ）は最初の計画によるところが多い。しかし、京の街の多様性は決して最初の計画と関係なく、長い年月を通して、無数の手によって徐々に築き上げられたものである。後者の方が街の楽しさの形成に不可欠なエネルギーとなる。街は歴史である。

現代の都市計画のやり方は、大きくは二つに分けられると思う。一つは現状を維持して、小規模で徐々に築いていく方法であり、もう一つは現状を無にして、まちを大規模に革新するような方法である。中国の都市計画は特に後者の方法を取りがちである。長い目で見ると、二つの方法のどちらをとるにしても、街の中身は結局、そこで生活する人や個々の小さな力によってつけ加えられていくもので

ある。

しかし重要なのは、現在生きている人にとってどうかということである。いくら才能のある建築家或いは計画者でも、歴史を築くことはできない。築けるのは歴史の中の小さな一段階である。街の形成には無数の手と長い歳月が必要である。建築家などが一度につくっているのは街ではなく、街の形に似ているような施設に過ぎない。

従って、古い市街地を白紙の状態にするのは現在の人にとって問題がある。つまり、そのやり方は、彼らを歴史の厚い基盤から追い出し、薄っぺらな土地においてゼロから築いてもらうようなことに等しい。新しい街は冒険と新奇が感じられるかもしれないが、成熟するまでには時間がかかる。

私は現在に生きる人として歴史において生きたい。たとえその歴史が京都のように深くなくても…。

（京都事務所留学生　り　かん）

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

自分とは異なるものに触れて、精神の自在で大胆な力を蘇らせる 提言「21世紀の風流を京都に」のあらまし

廣部　出

去る9月18日、京都府に対して「京都の府民文化の未来を考える懇談会」による文化振興の提言がなされました。同懇談会は、岡本道雄先生（(財)国際高等研究所理事長）を座長として平成7年2月に発足し、以来2年半あまりにわたって、アルパックは事務局としてお手伝いをして参りました。

提言の内容を概していえば、これは人と自然の関わりから文化のありようを改めて問うものであり、「21世紀の風流を京都に」を基本理念として、京都で暮らし、働き、遊ぶすべての人々、企業、団体、自治体が、文化の彩りを高める担い手であることを指摘するとともに、京都府行政に対してその役割を具体的に示したものとなっています。

21世紀の風流を京都に

理念を指し示すこの言葉は、次代を「節制と安定の時代」と目した時、人間社会が陥りやすい閉塞への傾きを明るいものに転じうる力を持つ文化のあり方を表わしたいとの意味で選ばれました。

ここでいう「風流」の意味あいは、耳慣れたものとは少し違うかもしれません。即ち、提言にあっては、原義に則ってその核にあって揺るがぬ意味を汲み、「自分とは異なるものに触れて魂を打ちふるわせ、精神の自在で大胆な力を蘇らせることである」と定義しています。「京都から」ではなく「京都に」とあるのは、この意味の「風流」が決して外向きのベクトルではなく、存在（be）としての京都を満たすべき精神であるからに他なりません。

「風流」を興す

「21世紀の風流」を京都で実現させるために、あくまで相俟って語られるべき同根のものであると位置付けつつ、3つの目標を設定しています。

○日々に味わい深い時を実感できること（生活文化の振興）

○多彩に輝く風土をはぐくむこと（地域文化の振興）

○京に集まり、京から広まる表現をみがくこと（京都の芸術文化の振興）

ここには、文化は一人ひとりの生活から生まれるとの視点、人と自然との恒常的な関わりの場である地域を輝かそうとの視点、伝統の上に絶えず新しい文化を培ってきた「京都文化」尊重の視点、これらそれぞれの視点を大切にしつつ、私たちが共に歩む姿勢を確認しようとの呼び掛けが込められています。

行政への提言

もちろん、京都府への提言ということですから、これらの目標に向けて、京都府の果たすべき役割も明示しています。「21世紀を拓く事業の展開」、「文化拠点の整備」、「文化振興体制の強化」の側面から具体的な諸施策を提唱し、行政に対して、政策立案は当然として、予算・組織・人事においても「21世紀の風流」の精神を持って臨む姿勢を求めています。

理念に内在するもの

人の心に響け、と大いに力を注いでまとめられた提言。その理念の内側に在するものは、人類にとっての現代的テーゼかもしれません。

―人ならば、魂をふるわせよ―

秋も深まって、朝晩はめっきり寒い。さてはふるえる身体ゆえ、お銚子者の熱き風流で腑を満たしますか....

（京都事務所　ひろべ　いずる）

地域の連携と交流の切り札 ～筏下り体験記～

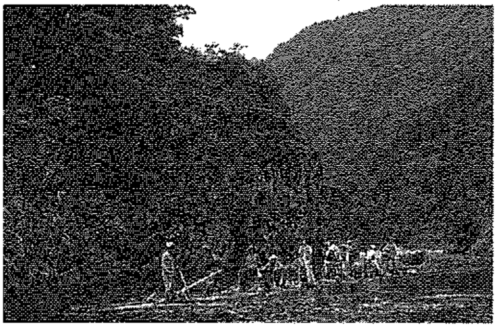
小阪　昌裕

残暑から開放された９月下旬に、京都市内から約５時間をかけ、北山川（和歌山県北山村）の筏下りを体験しに行きました。

日本唯一が三つもあるまち

まちづくりの基本は、そのまちにしかないものを大切に活かしていくことですが、北山村には全国で唯一と誇れるものが少なくとも三つあります。

一つ目が、村の周囲は三重県と奈良県に囲まれながら、和歌山県の飛び地（県とは北山川を通じて熊野川町とつながっている）の自治体であることです。また、村名は奈良県風、郡名と郵便・電話番号は三重県風とどうも和



スリル満点！北山川の筏下り
出典：パンフレット

歌山県らしくないのです。というのは、この村は明治維新まで隣接する市町村とともに同じ藩の支配下にありました。廃藩置県の際に、熊野川の支流北山川でつながっている新宮と結びつきが強かったため新宮とともに和歌山県に編入されたのです。

二つ目が、料理の隠し味に、健康・美容に、さらに二日酔いにもきくという万能の天然食酢かんきつ“じゃばら”の生産地なのです。冷やして飲むと体の中からサッパリし、品名が“邪をはらう”からつけられたといわれるのにも納得できます。

スリルある伝統文化の体験

三つ目が、北山村の観光資源の一つである北山川の筏下りです。

本来、筏下りは切り出した材木を河口の新宮まで筏にして運ぶ、勇壮であり伝統的な運搬方法でした。訪れた人に体験してもらおうと観光資源として再現したのがほんの19年前。日本で筏下りの再現をしているのはここだけです。

筏下りの運行は５月から９月までで天候に左右されるため、現に、７月は台風のためルートの一つは欠航中でした。

道路からの景観もさることながら、川面から見上げる景観もはるか上空の釣り橋あたりに台風の増水により樹木が倒れたまま生えていたり、ゴミがその枝に残っていたりと真に迫力があります。また、ラフティングやカヌ

ーを見ながら、立ったり座ったり、水しぶきをあび、本物の経験を積んだ筏士さんとの会話も楽しかったです。

筏の全長は、約30mで、約4mの筏が7連つながっています。一台に乗る筏士が3～4人、水量が少ない日、流れのない場所、海からの向かい風の場所などでは、当然人力のみが頼りとなります。筏下りというよりも筏押しという場面も多々ありました。筏下りには、筏士だけでなく筏乗り場への、また降り場からお客さんの配送と、バラした筏のトラック積載など多くの人手が必要です。体験してみたパンフレットに「完全予約制」が強調されていたのにも納得しました。

近年この村に温泉保養館がオープンし、年間観光入込客数が倍増し、村の人口の 100倍の約60,000人もの人が訪れています。その中で筏下りが約 9,000人。現在、筏士は30人弱が登録されていますが、一人前になるのには5年はかかるため後継者づくりが大変だそうです。あまりお客さんが増えすぎても人手が問題となるのです。

運搬から観光へ、観光から交流へ

昔、筏乗りは、上乗り、中乗り（北山村の筏下り）、下乗り（瀞八丁のジェット船）とあったそうです。上流にダムができて透明度は落ちたものの、筏師をはじめ名前のついた岩や瀬等や筏士の宿泊所（さしずめ「川の駅」か）の再現、自作のわらじ・傘づくり、川を軸として藩政時代の3県境をまたぐネットワーク化などおもしろいことができそうだと思いました。

筏下りは、自然と人の力の勝負です。近年、日本の伝統文化は、その後継者不足からどんどん失われつつあります。その地域にしかない資源を見直し活かしていくことが、これからの地域の連携や交流の切り札になっていきます。筏下りは、これから期待できる大きな資源といえそうです。

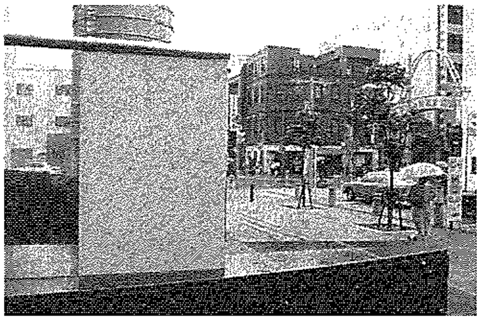
（大阪事務所　こさか　まさひろ）

白川通アートフェスティバル'97 を開催
アートによる魅力的な空間づくり

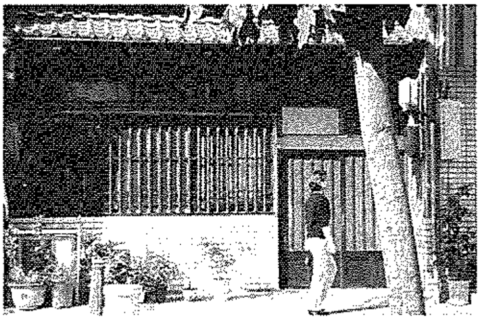
西村　研二

今、名古屋で一番ホットな場所であるナディアパーク。その通り沿いの建物の約50ヶ所に黄色いカッティングシートが貼られ、歩く人々を不思議がらせました。

舞台となった白川通は大津通から伏見通まで東西に延びる通りで、以前は、問屋が軒を連ね、あまり人目につかない裏通りの感さえありました。しかし、88年に名古屋市美術館、96年にナディアパークがオープンし、それに応じて周囲にしゃれた飲食店などができ、大阪のミナミをまねて「栄ミナミ」と呼ばれ、



メディアパークのガラス面に貼られた黄色のカッティングシート。この近辺はしゃれた店もあり、若者が多い。



民家の玄関上にもカッテングシートを貼っている。建物規模、種類によらず白川通としての「色」を演出している。

場所ごとにあらかじめカットされたシートを貼っていく。ここではショーウインドーに設置中。

若者が行き来する通りへと徐々にかわってきました。

10月に行われた"名古屋世界都市景観会議'97"の一環として、白川通アートフェスティバル'97が開催されました。アートフェスティバルは、指名コンペ形式でアイデアを求め、実際の街路空間を使って都市景観をアートで演出するイベントで、美術館とデザインセンター・青少年文化センター（ナデイアパーク内）を結ぶ"アートストリート"白川通をアピールするものでした。今回、名古屋事務所は同フェスティバルの事務局としてお手伝いさせていただきました。

コンペでは、造形美術、パフォーマンス、メディアアート、陶芸など7名のアーティストから様々なアイデアが集まり、最終的に選ばれたのが、久野利博氏の実施案「Untitled 1997-oct」でした。

白川通のイメージカラーを黄色と決め、通りに面する建物に黄色のカッテイングシートをリズムよく貼る、そのために久野氏は何度も通りに面する地域の人々のもとに訪れ、作品の説明を行いました。地域の人にとって、今まで裏通りだった所に若者が来るようになったと思えば、今度はアーティストが家に訪ねて来て、さぞかし首を傾げたことでしょう。久野氏の作品は通りを歩く人々とともに、そこで生活する人々に対しても都市景観を考えるきっかけを与えたと思います。

この白川通アートフェスティバル'97は一度限りの試みですが、同様の試みが今後も続くことを願い、最後に「'97」をつけています。

（名古屋事務所　にしむら　けんじ）

(社)日本廃棄物コンサルタント協会 若手技術者の研修会に参加して

松岡　浩史

入社して早くも半年が過ぎてしまいました。「ごみ」とつき合っていこうと思っていますが、「ごみ」はなかなかこっちを向いてくれません。そこで、ライバルたちを偵察してやろうと、去る7月10・11日に東京で行われた、(社)日本廃棄物コンサルタント協会主催のワークショップに参加してきました。

ワークショップのテーマが"廃棄物処理処分施設の立地選定のための留意点について"と、これを聞いただけで逃げ出してしまいそうでしたが、それくらいでへこたれていては、いつまでたっても「ごみ」とつき合えないと思いながら参加の手続きをしました。東京には数回しか行ったことがなかったため、緊張した面もちで新幹線に乗り込み、いざ出陣。迷いながらも会場に到着し、辺りを見回すと他の参加者たちが早くも集まっているではないか!!遅れてはならぬと思いながら着席し、始まるのを待ちました。

1日目は、参加者の中から基調報告として2件の事例発表があり、その後、3つのグループに分かれて約2時間のグループ討議が行われました。2日目は、藤沢市女坂最終処分場へ施設見学研修に行きました。

事例発表－1では「立地選定の事例とそのあり方」、事例発表－2では「埋め立て処分場の適地選定」の発表が行われました。適地選定の基準や方法が具体的に示され、とても

分かりやすい発表でした。問題点の解決の方法などをもう少し詳しく発表していただけると、私のように「立地選定」に関わったことのない者にとってイメージしやすかったと思いました。

グループ討議では、私はＡグループの一員として参加し、他の参加者と現状など率直な意見交換を活発に行いました。中でも住民の合意形成の問題や行政主導の現状についての意見が集中し、その打開策として、①地域特性に応じたスタンダードな用地選定マニュアルづくり、②分割埋立・部分跡地を利用した跡地利用の重み付けなどの提案がされました。Ｂ・Ｃグループにおいても同様に活発な意見の交換が行われたようでしたが、やはり住民の合意形成の問題が浮上しており、その打開策として、Ｂグループからは上位計画からの住民参加、Ｃグループからは中継基地やリサイクルプラザなどを考慮した迷惑施設からの脱却がそれぞれ発表されました。立地選定に関わらず、住民の合意形成は様々な段階で問題になるようで、私もこの問題を避けては通れないだろうと思いました。

施設見学は小雨の降る中で行われましたが、埋立前の状態であったため、どろどろにならずに見学できました。私が以前見学した施設と比べながら見学しましたが、今回の施設は思った以上に小規模でした。また、この施設をできるだけ長期間使用したいということで、今後の施設の活用方法にも苦労が絶えないだろうと思いました。

ところで、今回のワークショップでは問題が深まり広がっただけのようでしたが、他のライバルたちもなかなか苦労していることが分かりました。これからそれらの問題に一人で立ち向かうよりも、研修の場を通じて親しくなった数名のライバルたちと情報交換しながら「ごみ」とつき合っていくことになりそうです。このことは今回の研修で得た大きな収穫です。

おおやふれあい市民農園農事通信　No.２

ニュースレーターNo.84でも紹介しました「おおや農村公園」のふれあい市民農園で９月14、21日の日曜日、稲刈りが行われました。

カマを手にすることも初めての稲刈り作業でしたが、隣の区画の家族の方の手伝いもあり、約50㎡の区画を３時間程で刈上げ稲木干し（天日干し）にしました。

収穫されたお米は指導員の方々により精米され、各オーナへ送られました。我が家の収穫は白米にして約15kgでした。

お米はヌカの部分に農薬が残留すると言われていますが、ここで収穫されたお米は全て有機米であるため、玄米でも安心して食べられると言うことです。近年、健康食として玄米が見直されています。上手く焚ければ玄米も美味しく頂けますので、機会がありましたら是非皆さんもご賞味あれ。

（大阪事務所　原田稔通信員）

「ごみ」は、私たちが産み出した子供のようなものです。みんなで、子供をうまく育てないと将来が心配です。これから仲間の輪をもっと広げて、「ごみ」と仲良くつき合っていきたいと思います。

最後に、様々な勉強をさせていただいた研修会の企画・運営・協力されている関係者の方々に深くお礼申し上げ、報告の終わりとさせていただきます。

（大阪事務所　まつおか　ひろし）

今、京都が元気だ！

三輪　泰司

ＪＲの新京都駅に続いて、10月４日、市役所前の地下街、Zest（ゼスト）御池がオープンしました。

実は、そのテナント選考に携わったので、翌日曜日にも行ってみました。新京極そして寺町の人通りの多いことに先ず驚きました。

ゼスト御池は、河原町通から御幸町通まで、往復しても 500メートル足らず。物販38、飲食９、サービス３で合わせて50店舗。京都初出店27。

ターゲットをヤングアダルト女性に絞り、どのお店も品揃えに、サービスに頑張っている様子があふれています。お客さんがまんべんにお入りで、嬉しかったです。

12日には地下鉄東西線の開通。この数週間、京阪電鉄京津線に名残を惜しむカメラの列でした。

京都はひとまわり遅れで、ビックプロジェクトが完成しているようですが、実はもうひとつの「元気」が起こってきているのです。

この７月に「市民参加検討プロジェクトチーム報告書」を頂きました。市役所の課長・

Zest御池

係長クラス20名が、学習・市民との意見交換そして議論してまとめたもので、あとがきは全員の真面目にして愉快なメッセージです。

桝本市長の「新しい時代の市役所めざしてチャレンジを」のアピールに応え、チャレ・プロチームが次々現れています。消防職員は市民アンケートに入り、下水道局ではイベントを企て、交通局ではお客の声を聞くためホームページにメールボックスを設け、ワイワイガヤガヤと元気が湧き上がってきました。アルパックの諸君も、ワークショップに参加したり元気がうつっています。是非そのような京都を見て下さい。

（取締役会長　みわ　ひろし）

うまいもの通信㉑
全国からうまいもんが勢ぞろい

鮒子田　稔理

中秋の名月を数日後に控え穏やかな月の夜、アルパック創設30周年記念フォーラム「ハートフル交流会」会場の一画で、アルパック屋台特産品コーナーを設けさせていただきました。日本全国を右往左往するうち、業務で関わりのあった地域や出身地の特産物がところ狭しと並べられ、テーブルの周りではひとしきり、うまいもん話に花が咲きました。たくさんの皆様のご協力で、50品以上の味の逸品が集まり、どのうまいもん達も故郷に錦を飾

らんと精一杯胸を張っているかのようでした。

「鬼伝説」をテーマとするユニークなまちづくりに取り組んでいる京都府大江町からは、この日のために特別につくられた巨大鬼饅頭がまちづくりに対する熱気とともに届けられました。

おばあちゃんが1粒ずつ手入れをしながら作る長崎県壱岐のらっきょうは市販品ではなく特に頼みこんで送っていただいた物。味の秘密は蜂蜜にあるというらっきょうは大粒で滋味深い味でした。

長い歴史の中で育て上げられた味、特産の素材を活かして開発された新しい味、どれもこれも独自の「うまいもん」でありながらなぜか懐かしい味がします。

うまいもん話に花が咲いた
"アルパック屋台特産品コーナー"

残念ながらすべてをご紹介することはできませんが、また、いつでもどこでもうまいもんの情報交換をさせていただき次回のこのような機会に備えたいと思います。

最後になりましたが、たくさんのご協力ありがとうございました。

（大阪事務所　ふしだ　みのり）

所員推奨！私が出会った味の逸品

＜特産品一覧＞

品　名	産　地　情　報	
あゆの昆布巻き	奈　良	吉野特産
鯖寿司	滋　賀	朽木特産
鮒寿司	滋　賀	湖国の特産
牛タンの燻製	宮　城	仙台市特産
味付昆布	福　井	敦賀市特産
飛騨ハム	岐　阜	
明宝ハム	岐　阜	明宝村特産
ハチミツ	長　野	伊那市特産
名古屋ｺｰﾁﾝ(ﾊﾑ,燻製,ｿｰｾｰｼﾞ)	愛　知	名古屋市農協センター
いり黒豆	京　都	丹波地域特産
サイボシ	大　阪	羽曳野市特産
ジャコごうこ	大　阪	泉佐野市特産
但馬牛の手作りｽﾓｰｸﾊﾑ	兵　庫	村岡町／生活工房香味燻
赤穂の天然塩	兵　庫	赤穂市特産
煮黒豆	兵　庫	多紀郡西紀町特産
ままかり酢漬け	岡　山	
烏賊のくちばし・煮干し	鳥　取	境港市特産
からし高菜	福　岡	博多
イリコみそ	長　崎	北松浦郡小佐々町特産
味アゴ	長　崎	長崎市特産
地鳥のくんせい	宮　崎	都城市特産
つきあげ	鹿児島	さつまあげ
トーフヨウ	沖　縄	
豚の頭皮の燻製	沖　縄	
生チョコレート	北海道	札幌市／ﾛｲｽﾞﾌｧｸﾄﾘｰ
手焼きせんべい	埼　玉	浦和市特産
キウイのゼリー	東　京	三鷹市特産

品　名	産　地　情　報	
月世界	富　山	砺波市特産
巨峰だんご	長　野	青木島町/大蔵商事㈱
星のしずく、宝づくり	愛　知	半田市特産
青山のえびせんべい	愛　知	幡豆郡一色町特産
亀甲おかき	愛　知	刈谷市特産
ゆかり	愛　知	名古屋市特産
でっちようかん	滋　賀	近江八幡市特産
菊水あめ、帆園炊	滋　賀	余呉町特産
鬼まんじゅう	京　都	大江町（特注）
加茂みたらし	京　都	下鴨神社近く
麩嘉（ふうか）饅頭	京　都	岩佐屋製菓
若あゆ	京　都	太極殿の京菓子
塩味まんじゅう	兵　庫	赤穂市特産

＜酒類一覧＞

品　名	産　地　情　報	
大雪渓	長　野	喜久水
自然薯焼酎「とろとろ」	愛　知	旭町特産
天（てん）	愛　知	三河地方特産
空（くう）	愛　知	奥三河特産
鬼ころし	愛　知	清洲町特産
酒呑童子	京　都	大江町特産
呉春	大　阪	池田市特産
飛鳥ワイン	大　阪	羽曳野市特産
近つ飛鳥	大　阪	羽曳野市特産
根日女ワイン	兵　庫	加西市特産
百年の孤独（焼酎）	宮　崎	児湯郡高鍋町特産

まちかど

天保山に世界最大の大観覧車が出現！

長谷川　めぐみ

海遊館でお馴染みの天保山に世界最大の観覧車ができているのをご存じでしょうか？噂を聞いた時は遊園地でもできたのかと思いましたが、海遊館の横に観覧車だけ、ドーンとできているのでした。

しかし大きいですよ、確かに。見上げると首が痛いのであまりお勧めできません。

えー、観覧車は地上112m（世界最高）、回転輪直径100m（世界最大）、定員８名×60台＝480名（世界最大）だそうです。ちなみに大人１枚￥700です。外観も美しく、イルミネーションが遠くからも見ることができます。実はこのイルミネーション、意味がありまして、明日の天気予報を表してまして、晴は赤、曇は緑、雨は青の各色で輝くというもの。近所の人に役立っているのかは謎です。

前回は夜景を見ようと、大勢で行ったら、なんと！１時間待ち。しかも相乗り６名で運転してたので、１組のカップルと乗り合わすことになり、申し訳ないやら気まずいやら．．まあ、夜景はとっても綺麗でしたが。

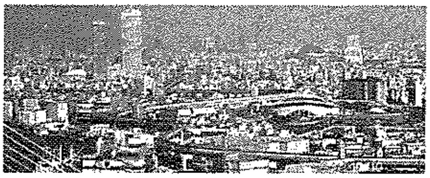
今回は昼だったので、祝日にもかかわらず相乗りもなく割とすんなり乗れ、天気も良く大阪の景色を存分に堪能できました。

乗ってすぐ足の下に見えるのは海で、ちょっとしたスリルが味わえます。しかし、視線を上げるとそこは水平線。輝く海と行き交う船。うーん、いい気持ち。六甲の山並も見えます。北側に目を移すと沢山のビル群。大阪ドームを目印にＯＢＰを探すと、ありました。いやー、何となく感動。

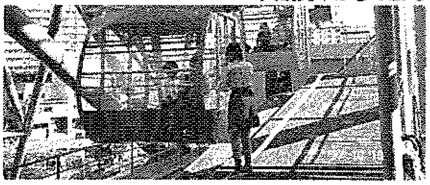
その時「ガタン」、急停止しました。一瞬アクシデントかと思いましたが、すぐに「車椅子の方の乗車の為一時運転を停止しております。ご了承下さい」というアナウンスが。成程。納得。

夜と昼、どちらも違った味わいなので、是非両方乗ってみるのをお勧めします。

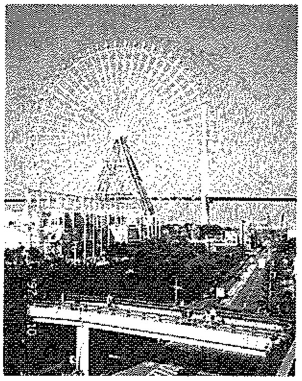
（大阪事務所　はせがわ　めぐみ）



大観覧車からの展望



乗場の風景



世界最大の大観覧車

アルパック（株）地域計画建築研究所

●本　　社
●京都事務所　〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F／TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764
●大阪事務所　〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F／TEL(06)942-5732　FAX(06)941-7478
●名古屋事務所　〒460名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F／TEL(052)265-2401　FAX(052)249-3925
●東京事務所　〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401／TEL(03)3226-9130　FAX(03)3226-9560
●九州事務所　㈱九州地域計画研究所　〒810福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F／TEL(092)731-7671　FAX(092)731-7673